

はしがき

教育ほど身近な現象はないといわれる。

人は、意識してか否かを問わず、誰もが教育を受け、また教育をする。制度としての教育に限定してみても、もはや教育を経験していない人を見つけることは不可能であろう。すべての人が何らかの形で最短で9年間の教育を受けることになっているだけでなく、高校が「準義務教育化」し、大学が「全入時代」を迎えるにつれ、学校での生活期間が人生に占める割合がどんどん長くなっていくのである。

教育のシステムほど拡張し続ける社会制度もまたない。学校教育法に定めた学校（いわゆる「一条校」）の人口は、総人口の4分の1を占めるといわれる。文科省の2013年度の統計によると、現在、57,845校の学校に1,943万人が在学している。この「巨大産業」を「教育を司る」ことを職業とする133.7万人の教師が支える。学校は、教師と歴史を共に栄えてきた。公教育制度を担ってきた近代学校制度の歴史は、教師の役割が「近代的職業」として定着した歴史でもあったのである。

現代は「職業社会」といわれる。この複雑に分化した職業の世界において、われわれは身近にある職業以外はほとんど知らないか、知っていても断片的である。漱石が「天下に職業の種類が何百種何千種あるか分からない」ほど、職業がどんどん細分化していく中で、「自分の生命を託すべき職業」を見つけることの難しさに言及したのは、1911年8月の明石での講演においてであった。それからちょうど100年経った2011年に、厚生労働省は職業分類について大幅な改定作業を行い、もとの27,637種の職業名について「名称の整理」と「表記の統一」を図り、最終的に約17,200種の職業名を同省の「職業分類表」に採録している。職業名が大幅に減少したとはいえ、17,200種の職業とはやはり膨大な数である。そのほとんどが日常生活とかかわりを持たないか、意識されない職業であることはいうまでもない。同「職業分類表」において、教師は「専門的・技術的職業」という大分類項目の中の「教育の職業」として分類されている。この「教育の職業」は、数ある中でも恐らく誰もが身近に感じ、また誰もが「知っている」

職業といえよう。前述したように、誰もが教育を経験し、また何らかの形で教師とかかわりを持つからである。

そもそも職業とは定義が難しい概念である。ある人気アイドルが職業欄に自分のグループ名を記入して話題になった。職業の定義の難しさを実感させるエピソードである。厚労省の職業分類における定義によると、職業とは「職務の内容である仕事や課せられた責任を遂行するために要求されている技能、知識、能力などの共通性または類似性によってまとめられた一群の職務」となっているが、実際には明確な分類が困難な職業が無数に存在する。多くの人にとって職業は、収入を得て生計を立てることに第一義的目的があるが、そのほかにも社会生活において必要とされる役割を担うこと、人生の目標や生きがいを充足させ、実りのあるものにするなどの要素も重要だといわれる。現代において、職業は生きることのすべてでなく、職業に対して生きがい、社会貢献、帰属意識、使命感など多様な意味を賦与することは、教師など特定の職業に限定されるとは言いにくいのである。

『職業としての教師』という大仰な書名から、ウェーバー流の学問的追及を期待する読者がいるかも知れない。しかし、本書は膨大かつ複雑な職業システムにおける教職の構造的特性や社会学的定義への問いに学問的解答を与えようとするものではない。本書は、一言でいうと、職業という視座から教師の実像を浮き彫りにするための試みである。学習指導、生徒指導、学級経営、研修と研究を含めて、教員養成の仕組み、教師の服務、教師に求められる資質能力、教師と生徒の関係、学校と地域の関係、教師の喜びと悩みなどについての、教師の立場と現場の視点からの解説である。実際に教壇に立ち、現場で活躍している教師、あるいは長年、学校教育に携わってきた経験者に執筆をお願いしたのは、仲間として共感し、喜びと悩みを共有できる立場からの臨場感のある教師論を期待したからである。

本書の編集にあたっては、ご多忙の中、林誠之介所長をはじめ、神奈川県立総合教育センターの多くの方々にご協力いただき、白倉哲企画広報課長には、執筆のほか、複雑な編集作業も担っていただいた。ここで改めて感謝申し上げたい。

教師があるように学校があり、教師があるように教育があるといわれる。学校を取り巻く環境が大きく変化し、教師への視線がますます厳しくなっていく中

で、本書が教師という職業への理解が深まり、教育の在り方を思索するきっかけの一つとなれば幸いである。

2014年3月

金 龍哲

現場から問う 職業としての教師

目 次

| | |
|------|---|
| はしがき | i |
|------|---|

第1章 教師になる道

| | |
|---------------|---|
| —教員養成と採用のしくみ— | 1 |
|---------------|---|

1. 教職の魅力 1
2. 公立学校と私立学校の教員採用 6
3. 大学の教職課程による養成と「教師養成塾」 9

第2章 「子どもが好き」で十分か

| | |
|-----------------|----|
| —教師に求められる資質と能力— | 14 |
|-----------------|----|

1. 教師が問われている課題 14
2. 「まねぶ力」 15
3. 「教えることを学ぶ力」と「創造する力」 16
4. 愛の証としての「叱る力」 18
5. 関係性の構築力 19
6. 地域の一員となり、地域を知る 21
7. 教師への期待 22

第3章 教師の服務

| | |
|----------------|----|
| —全体の奉仕者としての教師— | 24 |
|----------------|----|

1. 服務の根本規準・服務の宣誓 25
2. 職務上の義務と教育現場での問題 26
3. 身分上の義務と教育現場での問題 28
4. 服務に違反したら 32
5. 非常事態に際して、何を優先するか 35

第4章 子どもが主役の授業をつくる

| | |
|---------------------|----|
| —学びのコーディネーターとしての教師— | 37 |
|---------------------|----|

1. 授業をつくる 37
2. 今求められている授業 38
3. 児童生徒の実態をつかむ 40

4. 単元（題材）による授業構想 41
5. 子どもが主役の授業をつくる工夫 43

第5章 「生徒指導」という仕事

—ケアする教師—……………48

1. 生徒指導とは何か 48
2. ケアリングという考え方 49
3. 生徒指導のキーワードと教師の役割 51

第6章 共に学び共に育つ

—子どもの支援者としての教師—……………58

1. 「困った子」から「困っている子」へ 58
2. 発達障害の理解 60
3. 「気になる子」への支援 62
4. 子ども支援の諸課題 66

第7章 学ぶ集団をつくる

—学級経営という仕事—……………68

1. 「学級経営」とは何か 68
2. 「学級経営」という仕事 72
3. おわりに—学級崩壊という負の幻を見ないために— 78

第8章 体罰は払拭できるか

—悪しき慣習にみる教職の権威と特性—……………79

1. 「これは指導ですか、体罰ですか」 79
2. 体罰の実態 84
3. 体罰発生の3つの形態 86
4. 体罰の法的な側面 89
5. 体罰防止に向けた環境づくり 91

第9章 学校・家庭・地域の協働性の構築

—よりよい関係づくりに向けた教師の役割—……………93

1. 開かれた学校づくりと地域との協働 93
2. 学校支援ボランティア 97
3. 地域との協働性構築の一環としての学校開放 101

第10章 子どもの知を創る

—研究者としての教師—……………106

1. 教師にとっての研究とは 106
2. 学校現場に根ざした研究 107
3. 子どもの知を創る 109
4. これからの研究 115

第11章 社会から信頼される学校づくり

—不祥事防止と学校経営—……………117

1. 開かれた学校づくり 117
2. 学校経営の展開 118
3. リスク管理の徹底 118
4. 不祥事防止対策 119
5. 個別課題の原因と防止策 123

第12章 子どもは地域で育つ

—地域文化の伝承者としての教師—……………128

1. 地域の生活の中にある教育力 128
2. 通過儀礼の持つ教育力 132
3. 地域文化を教材化する教師の力—地域文化の伝承者としての教師— 136

第13章 教師像の変遷からみた教職観

—専門職としての教師—……………139

1. 聖職者か労働者か 139
2. 「教師専門職論」の論理 142

3. 教師の専門職化は可能か 146

第14章 仲間とともに成長する

—学び続ける教師— 150

1. 制度としての研修 151
2. 行政研修制度 154
3. 教員免許更新制 158
4. 校内で行われる研修 159
5. 学び続ける教師 160

第15章 教師の歳時記

—教師の1日、教師の1年— 163

1. 教師の1日 163
2. 教師の1年 168

第16章 教師の喜びと悩み

—教職のやりがいと特性— 174

1. 地図には残らない仕事 174
2. 微妙な距離感をもって存在する異物 176
3. 悩む実践家 182

第17章 数字で見る教師の素顔

—データが物語る教師の現状— 185

1. 学校という「巨大産業」 185
2. 教採の難関 187
3. 職場環境と勤務実態 194

